

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02332

研究課題名(和文) 河原温の秘匿された「生涯と制作」の解明

研究課題名(英文) Study on the Hidden Life and Work of On Kawara

研究代表者

平出 隆 (Hiraide, Takashi)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：90407825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：1959年に日本を脱出した河原温は、公の場に姿を現さずに自身の生の痕跡をコンセプチュアルな美術作品に残すことで、世界的なアーティストとなった。そのブックアートを収集し精査し、複数のシリーズに分断された日付を総合することによって、生涯と制作の間の隠された関係を浮彫りにした。また、日本時代とニューヨーク時代の間の一見「断絶」と見える時間に秘められている「飛躍の論理」を明らかにした。

研究は、伝記的記述のために作家自身から提供された資料を基にしたの基盤的なものである。「言語と形象」をめぐる展覧会や研究会、貴重なコレクションの創始、河原温作品を収納する象徴的な構造物の設置などが明確な成果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ニューヨークを拠点にした河原温は、書物を核にしたコンセプチュアル・アーティストとして世界的な存在となりながら、その実像は謎のまま、伝記的取材や写真撮影を求められてもすべて断ってきた。当研究は、最晩年に託された貴重資料を基にその生涯を解明しようとした。

当研究は河原温財団の全面的な協力を得ることで、河原温を軸にした展覧会の開催、作家自身指定の「重要書籍」のすべてを収集した「河原温ブックアート・コレクション」の創設、それを象徴する記念碑的構造物の図書館設置などを実現した。これらを総合した研究会やアーカイブ用ホームページも実現し、今後の資料公開と伝記刊行の基礎を整えた。

研究成果の概要(英文)：After escaping from Japan in 1959, On Kawara became a first-rate international artist by leaving traces of his life in conceptual art works without appearing in public. The artist's books have been collected and scrutinized, and by synthesizing the dates broken into multiple series, the hidden relationship between his life and his work was brought to light. This study also reveals the "logic of the leap" hidden in the seemingly "disconnected" time between the Japanese and New York eras.

The research is grounded in the material provided by the author himself for the biographical description. The exhibitions and studies on "Language and Forms," the creation of a valuable Book Art Collection of On Kawara, and the installation of a symbolic structure to the library of Kawara's works were clear results.

研究分野：芸術学/詩学

キーワード：言語と形象 河原温 コンセプチュアル・アート ブックアート

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

コンセプチュアルアートの創始者の一人として世界に衝撃を与えた河原温(1933 - 2014)の芸術は、国際的な美術批評の場で、美術が言語の本質や時間の本質とかがつてないほど合一化した例として、すでにさまざまに論じられていた。河原温は、自身の展覧会にまったく姿をあらわさず、写真を撮らせず、手跡を残さない、自作について語らないという、徹底した「作家神話排除」を行ってきた作家であり、その生涯の事実調査は、きわめて困難な課題としてありつづけた。代表者は1995年、ケルンの河原温展での講演「瞬間の革命 言語としての河原温」で、このことを前提にしながら、そこには日本古来の日記文学や日本近代の私小説の流れにつながる、特異で非西欧的な時間意識があることを指摘し、その講演内容によって河原温自身の信頼を得、協力を得られる関係を持っていた。また、本研究のベースともなっている科研費(基盤研究(C))(一般)/25370112)の研究開始当初では、まだ河原温が存命であったために、研究目的は作家論より作品論であり、そのような独自の時間意識を論じながら現代美術における「言語と形象」の本質論に踏み込むことであった。

しかし、2014年6月の河原温の死によって研究の状況は一変した。翌年のグッゲンハイム美術館での大回顧展によりその全貌が見つめなおされるとともに、これまで謎のうちにあった画家の実存的側面への考究が求められるようになったからである。画家自身が禁じた実生活へのアプローチは、その遺志を承継する遺族によって、なおも厳しく継続されているが、この新たな状況下で遺族は、代表者に対して例外的に、資料を提供しつつさらなる調査研究を求め、作家に関する非実証主義的「伝記的作品」を求めた。代表者の置かれたこのような立場の貴重さの上で、実存性を消去しつつつけた作家の逆説的バイオグラフィーのための基礎を固めることとなった。

2. 研究の目的

本研究は、実存性を消去しつつつけた作家の逆説的バイオグラフィーのための基礎を固めることが目的である。

ニューヨーク時代の河原温は、そのコンセプチュアルな方法を貫徹するために、展覧会など、すべての公的な場所に姿を現さないこと、自身の作品について口を閉ざすことを自身に課した。そのために、一般の目には実生活は謎に包まれていた。しかし、2014年にニューヨークで生涯を閉じる4カ月前に、河原は遺族及び財団を通じ、その作家としての全体像の伝記的記述を研究代表者に要請した。そして死後、2016年5月には多くの資料(DATE PAINTING I GOT UP I AM STILL ALIVE の詳細な手控えの写し)が当研究者に渡された。これによって研究の目的は、科研費(基盤研究(C))(一般)/25370112)の「言語と形象の本質的解明」という作品論から、それを踏まえながらも「秘匿された生涯と制作の解明」という作家論へと微妙に、しかし本質的に転換することになった。

具体的目標は以下の(1)、(2)とした。

(1)河原温の秘匿された作家像と制作現場の解明

河原温に対する論評は広範な国々の論者によって行われている。研究代表者の論はその中で、日本から脱出した「亡命芸術家」という文脈においてとらえ、棄てた風土・伝統・国語との関係を絵画に読むことが特徴であり、これは「他にだれも指摘しなかった」点として、河原温自身によって評価された。

また、詩論としての「言語/形象」論は、概念芸術における言語の問題に直通し、河原温が関心を深めた領域と交錯する。しかし、その「生涯」は作家自身により厳しく徹底的に表面から排除されてきた。ニューヨーク定住以降の河原温は年譜も文章も出さず、インタビューや写真撮影にも応じないどころか、自身の展覧会にもまったく姿を現わさないということでも知られていた。その後、秘匿された実人生及び制作の現場は、遺族によって、その部分的な公開が決断されている。本研究はこの決断に、あえて実証性と新たな作家像を付与しようとするものであるとした。

(2)伝記的著作の刊行への基礎資料の作成

秘匿された実人生及び制作現場の解明によって得られた資料は、河原温をめぐる作家主体に即した伝記的著作を執筆することに用いられる。すなわち本研究は、これまでに現れなかった逆説的バイオグラフィーの刊行に直結すると考えた。

3. 研究の方法

本研究では、以下の(1)~(3)の段階設定を行った。

- (1)年譜作成と「逸話群」の収集による「生涯」の究明
- (2)「逸話群」の整理とその定稿化による作家像の定着
- (3)制作と思考の裏付けとしての足跡、蔵書、遺品調査と目録化

年表作成

「生涯」を究明する伝記的研究は年譜を作成し、人物の移動を粗述するなどの方法によるのが一般的である。しかし、河原温は、「自身の時間と軌跡そのものを作品化し、その挙句、作品から

自身の実像を究極的に排除することを制作として行った」といえる。また、自身の紹介記事などにおいて「19 年生まれ」という一般の記述を拒絶し、「 日」というように日にちを数えて示すことに固執した。それに従うならば、「生涯」研究の書式も根本から再考しなければならないと考えた。よって、本研究での「生涯」研究は、画家自身の思考と企図を最大限に考慮しながら、表面上の整合的でリニアな記述は避け、時間を或る日の或る場面に断片化し、「逸話群」を集積するかたちとする。具体的には、同じ一日における複数の作品系列を横断するジグザグの時間軸によって把握できるよう、生涯の年譜的な記述を行うこととした。世界中を旅行した大旅行者として、空間的な移動の軸もここに統合され、把握することができるようになる。

関係者への聞き取り調査

夫人の河原弘子氏へのオーラル・ヒストリー聴取調査

河原温の実生活は謎に包まれている一方で、作品は虚構のないまったくの記録性を示している。「日付絵画」と《I WENT》は、時間と場所を偽ってはいはそもそも成立しない、記録としての作品である。研究代表者は科研費（基盤研究（C）（一般）/25370112）において、《I WENT》の追跡調査を行い、例えば、地図上における線そのものが、道の中央を貫くことによって、実際の足跡が取るラインとは決定的に異ならざるをえない、という認識などが結果として得られた。軌跡と足跡との間のこのような本質的な齟齬やズレは、意外にも街歩きによって容易に得られて作品理解の一つとなる。このような部分的な認識が、作品世界全体と画家自身の実存との関係の認識に広がりうると考えられる。こうしてたとえば、《I WENT》の追跡調査を、「生涯」の足跡調査につなぎながら、同時にその両者のあいだの齟齬やズレを点検していくこととした。

また、蔵書や遺品の調査から制作思考の背景を立体化することができるため、その可能性の探索を試みた。

さらに、河原弘子氏からの「逸話群」の収集では、制作の現場に即したものと限らず、「日付絵画」がときに社会的な事件や通俗的な事象への反応に陰影づけられているように、むしろ、日常における嗜好や出来事への反応、その他も重要な採集対象とした。

国際的なキュレーター、カスパー・ケーニヒ氏とアキコ・ベルンヘフト氏、国内の友人である彫刻家岡崎和郎氏、パリにおいて河原温の刊行活動を支援した編集者辻宏子氏への聴取調査
新しいシリーズ開始の契機、作家間の交友、書物からの影響、日常の言動等についての調査のため、こうした人々への協力を仰いだ。

以上によって得られる資料は、制作思考の背景を把握するために、きわめて有力な実証となる。そこで、作家自身によってトリロジー（三部作）と称される《I GOT UP》《I WENT》《I MET》にそれぞれ分断されつつ記録された時間を一つにつなぎ合わせることで、実際に生きられた時間が制作物と一体となって浮かび上がることに着目し、この膨大な作業を綿密に行うこととした。画家自身がいかに独創的な芸術思想によってその軌跡を描いたかを明らかにすることが、研究成果の発展になると考えたからである。

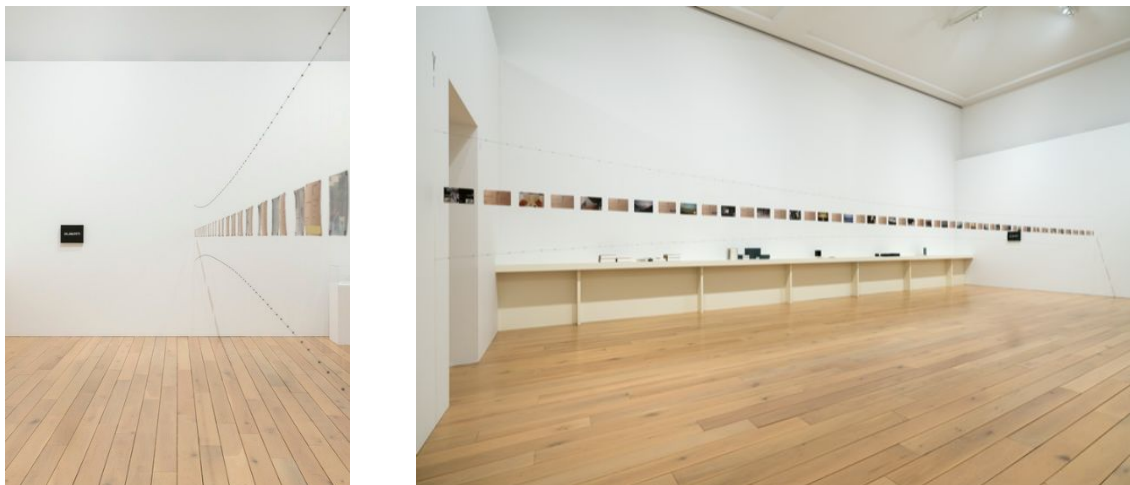
4. 研究成果

河原温のコンセプチュアルアートの全体は、日付絵画とも呼ばれる《Today》シリーズを軸にしながら、緊密に構成された複数のポスタルアートやブックアートのシリーズとしても残されている。本研究では、これまで散在してきたおびただしい作品における「日付」を《I GOT UP》《I WENT》《I MET》を中心とするブックアート上に点検しなおし、複数の作品シリーズ同士の「日付」を一体化することによってその緊密な関係を再構成し、作家主体の時間軸に戻すことを主とした。秘匿されてきたかのようでじつは作品の表層に確然と晒されていた作家の行為の痕跡を、こうして時間軸に沿って明らかにすることを試みた。

また、日本時代に示された創造者と鑑賞者との間の「コミュニケーション」をめぐる強烈な問題意識と「印刷絵画」という特異な方法意識とが、コンセプチュアルアートに転じたことによって途絶えたのではなく、むしろ飛躍の力となってニューヨーク時代へと継続していることを証明するため、1950年代に交流のあった瀧口修造や花田清輝、日本時代からの交友関係を持つと同時に、同時代芸術の問題意識を共有する彫刻家岡崎和郎氏、写真家奈良原一高夫人奈良原恵子氏ら、日本の美術家や文学者との関係の解明という課題が浮上してきた。この問題は、「言語と美術」を媒介する河原温の、「印刷絵画」論や根源的なコミュニケーション論、そして書物や印刷物 Printed Matters をめぐる思想と連携させて考察された。

研究成果の一つは「言語と形象」の根源的な関係を、Printed Matters を中間項に置くことによって総合化し、構造化する展覧会を構想、実現したこと、及びその手法の獲得である。すなわち、ジョセフ・コーネル、ドナルド・エヴァンズ、瀧口修造、岡崎和郎、奈良原一高、加納光於、中西夏之、若林奮等の同時代の作家たちの作品の中心に河原温のブックアートを置くことによって、「言語と美術 平出隆と美術家たち」展（DIC 川村記念美術館、2018年10月-2019年1月）を実現した。ここで「言語と形象」問題は、河原を中心にした上記の美術家の作品と研究者

自身の Printed Matters との媒介関係として実践的に投影されたといえる。



「言語と美術 平出隆と美術家たち」展での河原温作品と研究者 Printed Matters の展示 (DIC 川村記念美術館)

また続く成果は、研究と展示が河原温財団によって評価され、当研究が収集しきれなかった稀観作品 CODES や One Million Years の CD 版など、重要なブックアートが補完的に財団から寄贈され、2019 年 12 月、「河原温ブックアート・コレクション」が多摩美術大学大学図書館に創設されるに至ったことである。河原温は晩年、自身が制作した、あるいは制作に深く関与した多くの書物やカタログのうち、とくに 32 点を指定して Important Books と名づけていた。ここに 32 の Important Books のすべてを集成した、世界的にも稀なコレクションが実現した。

そこで、研究代表者を監修者として、同年 12 月、「河原温 Language & Art」展(多摩美術大学アートテーク)というコレクション創設記念展が実現した。会場では併せて、これまで多摩美術大学が所蔵していた河原温関連の書籍資料も展示されることで本展覧会は貴重な機会となり、多くの来館者を数えた。とくに「言語と美術」展から「河原温ブックアート・コレクション」に至る流れの中で、「Air Language」という概念を抽出し、言語と形象の二つの領域間をつなぐ共通言語の概念として仮設した。



「河原温 Language & Art」展(多摩美術大学アートテーク)

同時に、アートアーカイヴセンター主催の美術史家やアーキヴィストやキュレーター等の研究者を招いてのシンポジウム「アートアーカイヴとは何か」において、前記の「Air Language」概念とともに、そのブックアートのもつ特異な意義が論議された。とくに河原温作品そのものが自身の生のアーカイヴから人類史的時間のアーカイヴという側面を持っているということが、議論の軸を定めるだけでなく、他の研究者の抱える問題にも広がる点が大きな収穫となった。

また、このコレクションと一体的な建造物として、DIC 川村記念美術館の展覧会会場設計を委ねた建築家青木淳との共作《2×100 万年の透明梁》を実現した。これは、河原温の One Million Years の書物版と CD 版を内蔵するもので、恒久展示作品として多摩美術大学図書館に設置された。書物版 One Million Years は、制作時点から数えて、過去 100 万年の年号を十進法のブロック状に印字する「過去」の巻と、未来 100 万年の年号を同様に印字する「未来」の巻から成る。書物版は、見開き 2 ページに 1000 年を収める揺るぎない組版で各巻 2001 ページとし、1 つの堅牢な函に収まる。一方、CD 版は、この年号を男声と女声が交互に読み上げる、作家歿後もなお進行中のプロジェクトの録音シリーズである。CD は現在、過去と未来 151 枚ずつの合計 302 枚に達しているが、それぞれはまだ 100 万年のほんの一部にすぎず、この恒久展示では、1 万年期を読み上げる CD のみを抜き出し、空白の時間の膨大と今後の増殖の兆しを示すことにした。また、人が近づくとセンサーが作動して、過去と未来 200 万年の年号を読み継ごうとしているその男声・女声が聴こえる装置を付設した。すなわちこの構造体は、今後、国内外の研究者や学生に対し、河原温コレクションを象徴し、河原温研究を促す記念碑的建造物となった。



河原温 + 青木淳 + 平出隆 《2×100 万年の透明梁》(多摩美術大学図書館)

一方で、言語と美術をめぐる思考回路を建築的な方法によって組み立てることで、新たな研究手法を掴みつつある。すなわち、「言語と美術 平出隆と美術家たち」展において「展示室の循環構造と書物の空中展示」を組み合わせた会場設計が、現実的な構築物の中に多角的な論理構造を保存したからである。したがって、この建築物の構造を思考空間へ移行・再保存することで、河原温研究のシステム上のありかたも、より強固で客観的なものとして計画されるようになった。そこで、研究を持続させるための web サイト「airlanguageprogram.com」が構築され、この間に協力を得た美術研究者、文学研究者、哲学研究者、書物史研究者、建築家等の人々が共同研究するための多角的な構造をもった「言語と美術」研究のホームページ開設に至った。

河原温は「言語と形象」の本質テーマを解くために、作家としてあえて「言語と美術」を媒介する「書物論」を取り込んだと見られる。また、その「書物」は人類史の時間より大きな時間を内包するという果敢な試みを実現したものであるために、その「書物」概念は、これまでの書物史や書物概念を遥かに超えた「始原的な書物思想」として現れている。したがって、その本質を読み解こうとする研究の流れは、人類学や古代の原子論的哲学を踏まえた観点から、科学、芸術、哲学を再統合しようとしたものと考えられる。壮大な宇宙意識に連続する河原温による「書物」概念は、2020 年 3 月に刊行された『芸術人類学講義』(鶴岡真弓編、ちくま新書)における研究代表者の論考「野外をゆく詩学」において統合的に論じられた。本論考は河原温論を軸にした「言語と形象」論の一集成であり、作家の「生涯」の実証研究とは表裏の関係であるが、本研究の大きな構想の骨格を示すものと考えられる。

上記の研究基盤整備によって、実存性を消去しつつけた作家の逆説的バイオグラフィーのための基礎を固めることが実現された。河原温伝記の執筆・出版へ向けて作業が進捗中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 詩について
3. 学会等名 ノルウェー文学祭（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 「言語と美術」展について
3. 学会等名 Operation Table 北九州（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 言語と美術
3. 学会等名 富山県詩人会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 物の秘めたる言語
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所 第6回「土地と力」シンポジウム『物質と生命』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 終わりなき対話
3. 学会等名 Crystal Cage College 青山 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 新しい書物論の構想
3. 学会等名 Crystal Cage College 青山 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平出 隆, 郡 淳一郎, 澤 直哉
2. 発表標題 空中の本へ
3. 学会等名 DIC川村記念美術館主催シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 空中の本へ
3. 学会等名 かまくらブックフェスタ (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 本と世界のアナロジーをめぐって
3. 学会等名 神戸芸術工科大学特別講義（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 公開討議「ことば・郵便・アート」第3回「本と手紙の闘い」
3. 学会等名 多摩美術大学生涯学習《本をつくる・歴史をつくる》
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 「言語と美術」展のアーカイヴ化について
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所第1回「言語と美術」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 「言語と美術」展のホームページについて
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所 第2回「言語と美術」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 建島哲, 平出隆, 鶴岡真弓
2. 発表標題 三巴の創造: 大学・研究所・図書館のチャレンジ
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所「渦巻の大宇宙」展
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 AIR LANGUAGE さらなる空中の本へ
3. 学会等名 かまくらブックフェスタ(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 Air Languageの発見
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所 第7回「土地と力」シンポジウム『時間と空間の交点』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆, 青木淳
2. 発表標題 「言語と美術」のアーカイヴ化と「空中の本」
3. 学会等名 多摩美術大学アートアーカイヴセンター・シンポジウム「アートアーカイヴとは何か」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平出 隆
2. 発表標題 「言語と美術」展のアーカイヴ化と「空中の本」
3. 学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所 第3回「言語と美術」研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鶴岡 真弓（編著），榎木 野衣，平出 隆，安藤 礼二	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 芸術人類学講義	

1. 著者名 平出 隆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 DIC川村記念美術館，港の人	5. 総ページ数 205
3. 書名 言語と美術：平出隆と美術家たち = Language and Art :Takashi Hiraide and the Artists	

1. 著者名 平出 隆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 紀伊國屋書店出版部	5. 総ページ数 304
3. 書名 私のティーアガルテン行	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----